
JACKPOT

狼木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JACKPOT

【Nコード】

N5552G

【作者名】

狼木

【あらすじ】

強盗に両親を殺された元少年兵ニコラス 祖父母に引き取られ、祖父の学校の寮に住むことに。しかし、そこは女子校で……

プロローグ（前書き）

初作品です。駄文で申し訳ございません。

プロローグ

ガシャアン！何か割れる音がした。

「……うん」そんな音で目が覚めた少年 名前はニコラス。年は13歳。時刻は午前2時。最初は泥棒かと思ったが、日本でもかなり治安が良く、警備も完璧なこの家にそれはないだろうと、すぐにそんな考えを消した。きつとネズミだろう。

少し喉が渴いたので音のしたキッチンへ向かった。そこで彼は衝撃的なものを見た

「え？」床に転がっているのは血まみれの両親、そのそばには二人の男が立っていた。

「おい、どうする？」

「どうするも何も、殺すに決まってるんだろ」

「だよな。」男はニコラスに銃を向けた。

「じゃあな、坊主。」男が引き金を引こうとしたその時、ニコラスは近くにあったナイフを男に投げた。

「ぎゃああ！！」ナイフが男の左目に刺さった。もう片方は現状をまだ理解していない。弾は逸れ、一気に間合いを詰めたニコラスは刺さったナイフを押し込んだ。そしてすぐにナイフを引き抜き、もう1人の男の頸動脈を切った。

それから2日後、両親の葬儀が行われている。ニコラスは泣いていなかった。いや、感情そのものが凍っていた。葬儀が終わり、二人の老夫婦がニコラスのもとへやってきた。母方の祖父母、内藤夫妻だ。ニコラスに血の繋がった家族はいない。去年の春にアメリカの孤児院からワシントンに住むバレンタイン夫妻に引き取られ、その年の夏に父親の仕事の都合で日本に来た。「ニコラス……」「ううう……ニコラス」二人は優しくニコラスを抱きしめた。目からは涙が溢れていた。

1週間後

トントン、ニコラス

「失礼します。」ここは私立竜宮中学高等学校の校長室。

「おお、来たかニコラス。そこに座りなさい。」ニコラスは内藤夫妻に引き取られ、祖父内藤泰光の学校へ行くよう言われた。もう二人には可愛い1人の孫しかいないのだから…話しは戻り、泰

「ニコラス、この前話した通りお前にはこの学校に通ってもらおう。」

ニコラス

「うん。」泰

「そこでなんじゃが、お前にはここの寮に住んでもらいたい。」

ニコラス

「え？」驚くも無理はない。この竜宮学校は女子校なのだから。

「もちろん、ちゃんと理由がある。先日刑事さんから連絡があつてな、あの事件は単なる強盗殺人じゃあないかもしれないのじゃ。もしかしたらお前に何か危害が及ぶかもしれない。だから儂とばあさんの家より安全なここの寮に住んでほしいのじゃ。わしらにはもう、……お前しかいないのじゃ。」泰光は泣いていた。ニコラスは思った、祖父はそこまで考えて…

「わかつたよ、おじいちゃん。俺この学校の寮に住むよ。」

「すまんのぉ」

出会い

それから3分、ニコラスは祖父からこの学校についての説明を聞いていた。

トントン、

「失礼します。」1人の女性徒が入って来た。

「おお、東君。紹介しようニコラス、彼女は中等部三年生の東リツコ君。中等部生徒会長で、お前のルームメートじゃ。わからないことがあつたら彼女に聞きなさい。東君、この子が孫のニコラスじゃ。すまんが今日から面倒を見てやってくれ。」「はい。（おお、この子めちやめちや可愛い／＼）よろしくね、ニコラス君。」「こちらこそよろしくお願いします、東先輩。」「では話しはこのくらいにしよう。本当は担任の平野先生も紹介したかったんじゃが、彼は急用で学校にいないのう。せつかくの日曜日じゃ、ニコラス、東君に校舎を案内してもらいなさい。よいかな、東君?」「はい、別に構いません。（ニコラス君と二人つきりだし／＼）じゃあニコラス君、行こうか。」

「わかりました。じゃあおじいちゃん、失礼しました。」

「失礼しました。」二人は校長室を出た。

それから東はニコラスに校舎を案内した。中高一貫校なだけあってとても広い。そして

「ニコラス君、ここがプールよ。」二人はプールに来ていた。「うわあ。広いなあ〜!」

ニコラスは驚いていた。プールが2面もあるのだ。1つは水泳部が使っている。もう1つはシンクロナイズが使っている。「2つともインターハイの常連でね、何回か優勝しているの。」

「すごい!」

「フフ、ニコラス君は水泳が好きみたいね、じゃあ、もうちょっと見学し」「あれ、リツコ?こんな所で何やってんの?てか、その子

誰？「……」 彼女の名前は安藤ナオコ。水泳部だが、今はケガを
して部活には出ていない。そんなことより、今リッコは不機嫌
だ。せつかくの二人つきりを邪魔されたからである。「この子はニ
コラス。校長先生のお孫さんで、今日からこの学校に通うことにな
ったのよ。」 「ニコラス？男みたいな名前ね？」 「この子は男の
子よ。」

「ええええええ！？」

間違えるのも無理はない。ニコラスは身長が149センチがなく、
顔も女の子みたいだ。おまけに今は私服なので、間違われてもしよ
うがない。昔はよく女の子と間違われたものだ。 「……………はじめ
まして、ニコラスです。よろしくお願いします。」 そう言ってニコ
ラスが挨拶したその時

ムギユ、

「え？ノノノ」 「きゃあああ！…、可愛い〜！…！」 ナオコは
ニコラスを抱き締めた。

「ちよつとナオコ！！やめなさいよ。」 ナオコからニコラスを引き
剥がしたリッコ。

「大丈夫、ニコラス君？」

「はい／＼／」

ニコラスの顔はリングみたいに真っ赤だ。

「それじゃあ、他の所へ行こうか。」

「あたしも行く〜!」

「あなたは安静にしてなさい!」

「もう日常生活には支障はないようだ。それにあたしが付いてきて
いいかを決めるのはニコラス君でしょ?」

「うっ、」

反論できないリッコであった。

「フフ、ねえニコラス君。付いて行っていい?」

「べ、別にいいですけど。」

「やった〜!じゃあ次行こうか。」 「あっ、ちょっとまってよ〜」

「!」

これからの生活

「あそこが多目的ホール。よく演劇部が練習に使っているの。」
「へえ〜」

「……………」

「あそこが」
さつきからずつとこんな調子である。本当はリッコがニコラスに校舎を案内するはずだったが、ナオコに横取りされてしまった。それからずつとリッコは不機嫌である。しかし、リッコはこの後すぐ元気になる。

一通り校舎の案内が終わり、

「じゃあ、あたしは帰るね。」

「え！？本当に?!」

「あんたは何でそんなに嬉しそうなのよ(汗)」

「いいから。いいから。」

「はあ。ま、いいか。じゃあねニコラス君。あと、リッコも……」

「さようなら安藤先輩。」

「じゃあね〜(フッフ、これで邪魔者はいない。)(じゃあニコラス君、私たちの部屋に行こう。)」

「ここが今日から君が住む部屋だよ。改めてよろしくね。」

「はい、今日からお世話になります。」

「そんなに堅くならなくていいよ。本当はもう1人チアキってルムメートがいるんだけど、お母さんが病気で入院しちゃってしばらくは戻って来ないの。つまりしばらくは二人つきりね。」

“二人つきり”という言葉聞いてニコラスは赤くなった。

「どうしたの？そんなに顔を赤くして。（ニヤニヤ）」

「いや、な、何でもないです／＼」

「本当に？（ニヤニヤ）」

「ほ、本当です！」「ウッフ、冗談よ。じゃあ晩御飯にしようか。ここでの食事は自炊か食堂だけど、せっかくだから今日は何か作るか。」

「あ、ぼく何か手伝います。」

「ありがとう。じゃあ野菜切ってちょうだい。あと、さっき言ったようにそんなに堅くならなくていいよ。」

「はい、じゃなくて、うん。」　それから二人で晩御飯を作っていた。

二人とも変に意識していて会話がほとんど無かったりするが……

「できた。」

それでも晩御飯は完成した。ちなみにカレーだ。

「それじゃあ、食べますか。」

「うん！」

「いただきます。」

「ニコラス君てさ」

「うん？」

「あんまり喋らないよね。」「ああ、特に喋ることもないし。昔からこんな感じでしたから、特に誰かに迷惑なるようなことじゃないから別にいいかな」「良くない!」「…」

「いいかいニコラス君。君は明日からこの学校へ行くんだ。そんなに無口だと友達なんかそんなにできないぞ!あと君は無表情すぎる!笑う門に福来るって言うくらいだからいつも笑顔でないと幸せが逃げちゃうよ!」「」

「東先輩……」

「それにニコラス君は可愛い顔しているんだからさ、明るくないと勿体ないよ!」

最後の一言がなければと思うニコラスであった。

進展（前書き）

特に進展はありません。

進展

ガチャガチャ 二人は晩御飯を食べ終え、皿を洗っている。
これも晩御飯を作った時みたいに無言のままだ。

(何か喋らなきゃ)

「／／／…あの、」

見事にハモった。

「／／／…えっ?!?!」

これまた見事にハモった。

「ど、どうしたのニコラス君…／／／」

「せ、先輩こそどうしたんですか…／／／」

「な、何て言うのかな…こつこつという雰囲気は何か苦手なのよね……」

「確かに。」

「……」

「……」

「プツ、ククク」

「クス、ハハハハ」

「アハハハハ！」

「ハハハハハ！」

「二人とも一緒のこと考えてたね。アハハ、あゝ可笑しい。」
「ほんとだね。」

「それにニコラス君の笑顔も見れたしね。やっぱりニコラス君は笑っていた方がいいよ。すごく可愛いし／＼／」

「先輩、あんまり可愛いって言わないでよ。」

「あ、やっぱりカッコいいって言われたい？」

「そりゃあ、僕だって男なわけだし。」

「でもね、うん……」

「何でそんなに悩む？」

リツコが悩むのも無理はない。この前言ったようにニコラスの身長は149cmしかない。おまけにリツコの身長は165cmだからニコラスはリツコに今上目遣いをしていることになる。こうなれば答えは決まっている。

「ごめん無理。」

「うう、わかりましたよ。」

「まあまあ、そんなに落ち込まないで。これも個性なんだから。そんなことより、早くお皿を洗っちゃいましょう。」

「（個性が…）そうだね、早く洗っちゃおう」その後も二人の会話は弾んだ。特に二人とも甘い物が大好物で、どこの店のチョコがおいしいとかそんな内容の話ばっかだ。

「それでね、あそこのチーズケーキがすごくおいしいんだけど、結構高いのよね」

「ああ、この前テレビでやってたあれか。確かに値段を見たときはビックリしたよ。しかも1日20個限定。」

「そうそう。だからお金を持っていても簡単には食べれないのよね。」

「今度食べに行く？」

「朝の7時から並ぶの？それって結構キツくない？」

「でもそれだけの価値はあると思うよ。」

「うん、じゃあ今度の休みに行こうか。」

「そうだね。でもその前にこれを片付けなきゃ。」二人は話しながら皿を洗う手が止まっていた。

「うわ、全然片付いてないよ。」

「早く終わらせよ。」

片付けが終わった後、二人はホラー映画を見ていた。リツコがわざとらしくニコラスに抱きついたり、胸を押し当てたりしてニコラスを困らせていた。そんなこんなで今の時刻は午後11時。

「ニコラス君、君は明日早からお風呂先に入っているよ。」

「そっだね。じゃあお先に。」
ボタン……

「さてと。」

リツコが先にニコラスに風呂に入るよう言ったのにはもう一つ理由がある。

「どっやってニコラス君の貞操を奪おう……」
「そう、どっやってニコラスの貞操を奪おうかということ。」

「あの子はめっちゃめっちゃ可愛いから絶対モテるからな、今の内に対策を練っておかなきゃ。」
「生徒会長にあるまじき不純な考えである」

「うーん、どうしよう。ニコラス君は可愛いから中高等部の大半は必ず狙ってくる。特に高等部生徒会長はあたしよりスタイルいいし、美人なのに相当なシヨタコンだからな。」（そういうリッコモスタイルはいいのだが、上には上がいる。年の差か、リッコは高等部生徒会長でシヨタコンの井園ミカにはかなわなかった。（敵が多いから速くしないと！かといって無理矢理はかわいそうよね）「かといってゆつくりはしてられないのよね。」「何がゆつくりしてられないの？」「うわあ！！ビックリした〜。いつからそこに居たの？」「3分くらい前からここに居たよ。」「え？」「それより何がゆつくりしてられないの？」「い、いや何でもないよ、こっちの話し。」「ふーん」「じゃ、じゃああたしはお風呂に入るね」

シャアアア「ふう」（あたし何考えてんだろ〜）シャワーを浴びて落ち着いたかに思われたリッコ。しかし、（あたしニコラス君と同じ部屋なんだからみんなより有利じゃん！）そうではなかった。（チアキは当分帰ってこないからしばらくは夜は二人つきり！ニコラス君が寝ている間にあ〜んなことや、こ〜んなことを……ムフフフ）そんな妄想を膨らましているリッコ。ていうかよく生徒会長になれたな。

「ふう、さっぱりした。ニコラス君、そろそろ寝よう。」返事が帰って来ない。「ニコラス君？どうし、あらあら。」ニコラスはソファーですやすや寝ていた。そこでリッコがまた悩み出した。

（どうしよう。このままだとニコラス君が風邪引いちゃう。でもこの可愛い寝顔は見ていたいから起こすのは何だか勿体ない。何か良い方法は……！！そうだ！！）何か閃いたリッコ。一体何を思いついたのか。「ニコラス君起きて。こんな所で寝たら風邪引いちゃ

うよ。「ん、リッコ先輩？」「寝るならちゃんとベッドで寝なさい。ちなみにニコラス君の部屋はここだから。」「は〜い。」
「(フッフ、可愛い)それじゃあおやすみ。」「おやすみ〜」
そう言っただけでニコラスは寝た……………リッコの部屋で。こういうことである。

今ニコラスは寝ているがこのままでは風邪を引いてしまう。
しかし起こすのは勿体ない。
ではどうすれば良いか。

リッコは閃いた。

今ニコラスを起こしても恐らく本人は半分寝ている状態である。

そしてニコラスにはまだどこが自室か言っていない。

つまり、うまく行けばニコラスを自分の部屋に誘導することができる。そしてリッコの計画は見事成功したのだ。「ウッフ、大成功。本当はこのまま襲っちゃおうと思っただけ、やっぱ無理矢理はかわいそうだから添い寝で勘弁してあげる。ウッフ、明日の朝が楽しみ。それじゃあおやすみ。チュッ」そう言っただけでニコラスの額にキスをしたリッコであった。

出来心

警視庁

今の時間は朝の6:30。にもかかわらず昨夜からずっと、ある事件’の捜査をしている男がいる

東 ケイゴ

数々の事件をその推理と行動力で解決してきた男だ。

その彼が今捜査している‘ある事件’とは 外国人夫妻強盗殺人事件 ニコラスの両親が殺害された事件である。しかし、強盗殺人と言うには不審な点が多い。

第1に事件の起きた地域にある。

《治安がいい》 つまり、それほど田舎なのだ。現にその地域の住人は裏口に鍵をかけるという習慣が無いし、泥棒や空き巣の被害もほとんど無い。

第2に被害状況である。

荒らされた形跡はいくつもあつたが、金目の物が盗まれた形跡は1つも無かつた。

他にも強盗二人の身元が不明だったり、見事な防犯装置の解除など、例を見ない事件なのだ。そして東 ケイゴは昨夜からずっと捜査資料とにらめっこしていたのだ。

「だ〜〜！！！！ダメだ、さっぱりわからん！！！」（近所の住人も普通の夫妻だと言っていたしな〜、ん？）

「なんだこれ？」ケイゴの目がある項目に止まる。それは

「バレンタイン夫妻の経歴…」

そう、夫妻の経歴書である。そして一番注目したのが

「夫ギルバート・バレンタイン」ケイゴは生気を取り戻したように一気に復活した。

「雲を掴むような事件かと思ったが、案外そうでもないな。後は鑑識の」

ピリリリリリ、ピリリリリリ、ケイゴの携帯が鳴る。ディスプレイには米倉 マサルと表示され、それを見たケイゴは嬉しそうだった。

「もしもし」

『鑑識の米倉です。例の強盗二人の身元が判明しました。』

「それで？」

『結構ヤバイですね。あの二人は』

「そうか。わかった、ありがとう。」ケイゴの表情はさっきとは違い険しくなる。(この事件、思ってたよりヤバいかもな……だが！今さら退くわけにはいかない、やっと解決の糸口が見えたんだ)米倉の報告を聞き、身の危険を感じたケイゴだが、さすがは名刑事、ちよつとやそつとじゃ引き下がらない。(まだいくつか不明な点があるな。しょうがない!!)

「愛娘リツコのいる竜宮学園に行くか!!」

竜宮学園中等部寮

こちらも時刻は朝の6:30。昨夜から「ある計画」を実行中である。その「ある計画」とは

ニコラス誘導計画 寝ぼけているニコラスを自分の部屋に誘導し添い寝、あわよくば というしょうもない計画である。そして計画は見事成功、昨夜からずっとニコラスの寝顔を眺めているのである。

「ああ〜、ニコラス君の寝顔めっちゃめっちゃかわいい／＼／＼」(こ

れで男の子だから反則よね。母性本能をくすぐられるわ。フフ、
！そうだ！）リッコは怪しい笑みを浮かべた。そして
「ウフフ、よしよし」ニコラスを抱き寄せたのだ。ちょうどニコ
ラスの顔を自分の胸元に寄せて。

「ああ、もう最高……人生で1番の幸せだわ……」このまま時間が
止まればいい、そう思うリッコ、しかし！！！人生はそこまで甘く
ない。

リッコがニコラスを抱き締めて至福の時間を味わっていたその時
ピピピピピピピピピピ、とアラームが鳴り出した。当然、

「うん、ん？」ニコラスは起きる。

「お、おはようニコラス君。」

「……………」

「……………」

「う、うわああああ！！！！！！」

「きゃあー！！」

ニコラスは驚いて抱きついていたりリッコを押し退けた。

「な、な、何をしてるんですか！！！！！！」

「いや、つい出来心で。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5552g/>

JACKPOT

2010年10月10日03時18分発行